荒海の槍騎兵５

奮迅の鹵獲戦艦

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

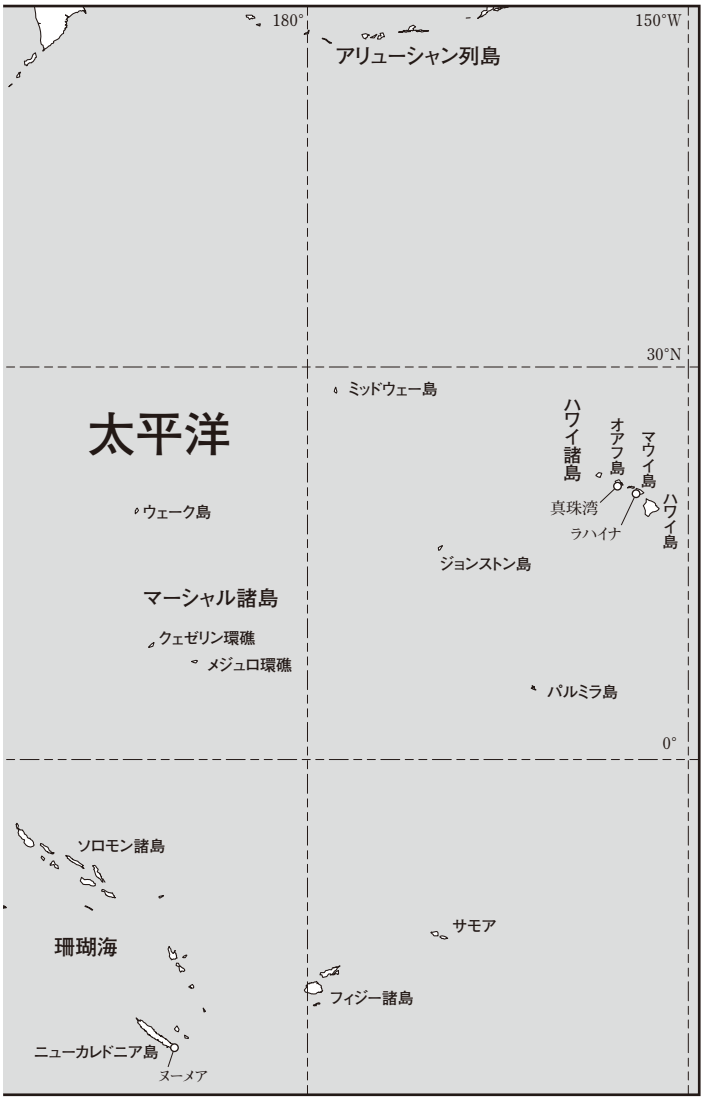
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

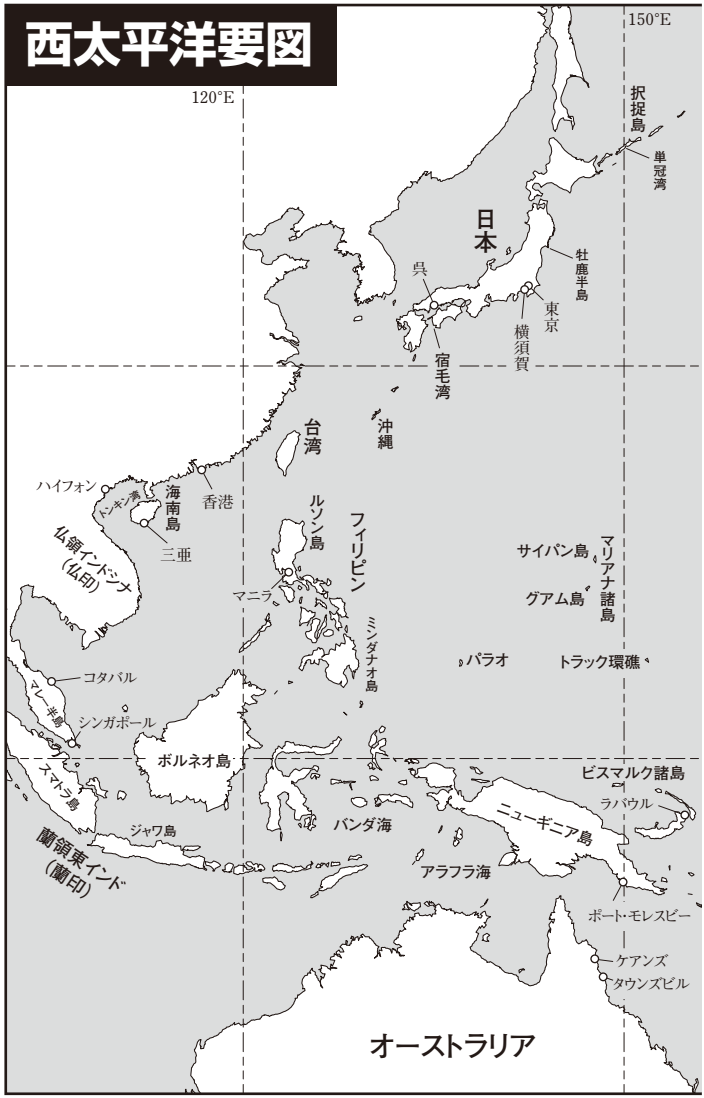
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　　画　高荷義之
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目次

第一章　合衆国の標的　9
第二章　捷号作戦　39
第三章　待ち受けるもの　67
第四章　ルソン沖の死線　107
第五章　「大雪」咆哮　169
第六章　海峡の北と南　223


180°
150°W
アリューシャン列島
30°N
太平洋
ミッドウェー島
ハワイ諸島
オアフ島
マウイ島
ハワイ島
真珠湾
ラハイナ
ウェーク島
ジョンストン島
マーシャル諸島
クェゼリン環礁
メジュロ環礁
パルミラ島
0°
ソロモン諸島
珊瑚海
サモア
フィジー諸島
ニューカレドニア島
ヌーメア


西太平洋要図
150°E
120°E
択捉島
単冠湾
日本
牡鹿半島
呉
東京
横須賀
宿毛湾
沖縄
台湾
ハイフォン
トンキン湾
海南島
香港
三亜
仏領インドシナ（仏印）
ルソン島
フィリピン
マニラ
ミンダナオ島
サイパン島
マリアナ諸島
グアム島
パラオ
トラック環礁
コタバル
マレー半島
シンガポール
スマトラ島
ボルネオ島
ビスマルク諸島
ラバウル
ニューギニア島
ジャワ島
バンダ海
蘭領東インド（蘭印）
アラフラ海
ポート・モレスビー
ケアンズ
タウンズビル
オーストラリア

フィリピン要図
エンガノ岬
ルソン島
リンガエン湾
クラークフィールド飛行場
ニールソン飛行場
ニコルス飛行場
マニラ
バターン半島
マニラ湾
コレヒドール島
バタンガス
キャビテ
太平洋
カタンドゥアネス島
サン・ベルナルディノ海峡
ミンドロ島
ミンドロ海峡
シブヤン海
シブヤン島
マスバテ島
カルバヨグ
サマール島
ビサヤン海
パナイ島
レイテ島
タクロバン
レイテ湾
スリガオ海峡
ディナガット島
セブ島
ネグロス島
ボホール島
ミンダナオ海
ミンダナオ島
0 100 200 300 km
0 100 浬

荒海の槍騎兵 奮迅の鹵獲戦艦 5

第一章　合衆国の標的

1

「目標まで一〇〇浬。低空飛行に切り替えろ」

陸上爆撃機「銀河」の偵察員席に座る吉沢修一大尉は、操縦員席の中井五郎上等飛行兵曹に指示を送った。

銀河は、昨年――昭和一八年八月より実戦配備が始まった、新型の双発中型爆撃機だ。

同じ双発の爆撃機でも、一式陸上攻撃機は最低七名の搭乗員を必要としたが、この機体は三座の艦上攻撃機や水上偵察機と同じく、操縦員、偵察員、電信員の三名となっている。

偵察員は、機首の偵察員席に座るのが、艦攻や水偵と異なるところだ。

偵察員席は、半球型の風防ガラスに守られている。視界は、艦攻の偵察員席より遥かに広い。ともすれば、空中にただ一人、放り出されたような孤独感を覚える。

今は夜であり、視界に入るものは無数の星々だけだ。

月齢は二三だが、月の出は二三時四〇分頃であり、まだ二時間ほどの間があった。

「高度〇一（一〇〇メートル）まで下げます」

中井の報告と共に、銀河の機首が大きく下がった。

夜の海面に、光は全くない。闇の直中に飛び込んでゆくようだ。操縦を部下に委ねている身には、特に恐怖感がつのる。

だが、中井の技量は確かだった。

一式陸攻に比べて速度性能が高く、運動性にも癖がある銀河の機体を難なく操り、高度一〇〇メートルで水平飛行に戻した。

「後続機、どうか？」

「全機、我に続行中」

電信員の井上由紀雄一等飛行兵曹が、吉沢の問いに返答した。

吉沢は、航法のチャートに現在までの飛行経路を追記した。

高度を下げる過程で一五浬を飛んだため、現在の位置は、目標――トラック環礁、春島の北西八五浬。速度計は一六〇ノット（時速約三〇〇キロ）を指している。

三〇分ほどで、目標に到達できるはずだ。

「トラックを爆撃することになるとは」

吉沢は、慨嘆した。

トラック環礁は、日本本土以外では最大の規模を持つ艦隊泊地であり、中部太平洋における最重要拠点だったが、去る昭和一九年九月四日に陥落し、米太平洋艦隊の前進基地となった。

トラック環礁各島の飛行場には、グラマンＦ６Ｆ〝ヘルキャット〟やカーチスＳＢ２Ｃ〝ヘルダイバー〟といった海軍機だけではなく、四発重爆撃機のボーイングＢ17〝フライング・フォートレス〟、コンソリデーテッドＢ24〝リベレーター〟までもが進出していることが、航空偵察により判明している。

いずれ、四発重爆撃機によるマリアナ諸島への大規模爆撃が始まることは間違いない。

大本営は、米軍の侵攻をトラックで食い止めるため、マリアナ諸島の守りを固めた。

トラック陥落の前、敵機動部隊の攻撃を受けたサイパン、テニアン、グアム各島の飛行場を復旧すると共に、基地航空部隊の切り札ともいうべき第一航空艦隊、略称「一航艦」を進出させた。

トラックの敵飛行場を叩き、敵重爆を撃破して、マリアナへの空襲を防ぐのだ。

とはいえ、昼間の強襲は難しい。

マリアナからトラックまでは、最南端のグアム島からでも五五〇浬の距離がある。零戦を護衛に付けても、トラック上空に留まれる時間は少ない。

また、Ｆ６Ｆの性能が零戦を凌駕していることは、ラバウルを巡る航空戦やマリアナ沖海戦、トラック空襲などから、既に判明している。

零戦がＦ６Ｆから陸攻、陸爆を守るのは、至難と言っていい。

このため夜間攻撃が選ばれ、この日――九月一一日は、第五二二航空隊の銀河二八機が、サイパン島のアスリート飛行場よりトラックに向けて飛び立ったのだった。

銀河は、「水平爆撃、雷撃、急降下爆撃の全てが可能であり、かつ戦闘機に匹敵する速度性能を持つ双発爆撃機」として開発が始まったが、戦時とあって開発が急がれたため、「急降下爆撃」が要求項目から外された。

エンジンは中島飛行機の「誉」二一型が予定されていたが、「誉」は整備が難しく、稼働率の低下が懸念されたため、使用実績がある三菱「火星」二五型に変更された。

結果、「一式陸攻よりも高速で稼働率も高く、搭乗員三名で運用できる中型爆撃機」として、前線部隊から好評をもって迎えられたのだ。

その機体が、トラックを襲おうとしている。

「外地における帝国海軍最大の艦隊泊地」だった場所が、攻撃目標になっているという現実を見るにつけ、戦況の逼迫を感じないではいられなかった。

「目標まで二〇浬。二小隊に『前へ』と送信」

吉沢はトラックとの距離を伝えると共に、後続機に信号を送るよう命じた。

第二小隊の銀河四機は、吊光弾を投下する役割を担っている。

その光を頼りに、他の二四機が投弾するのだ。

細川正一中尉が指揮する第二小隊の四機が速力を上げ、攻撃隊の前面に占位する。

二小隊より僅かに遅れ、嚮導機を務める第一小隊の二番機が、吉沢機の前に出る。

機長と偵察員を兼任する樋口八郎飛行兵曹長は、水平爆撃の達人として知られ、特技章も付けている。五二二空のみならず、上位部隊である第六二航空戦隊、いや第一航空艦隊全体にとっての至宝と呼ぶべ

きベテランだ。

二小隊一番機のコクピットに、オルジス信号灯の光が点滅した。

「二小隊より報告。『前方ニ島影。春島ト認ム』」

「全機宛発信。『突撃隊形作レ』」

吉沢は、中井に信号の意味を伝え、次いで井上一飛曹に命じた。

第二小隊の四機が吊光弾を投下すべく、上昇に転じた直後、それは起こった。

二小隊の右前方上空に発射炎が閃き、青白い火箭が闇を貫いたのだ。

火箭が二小隊長機を捉えるや、空中に火焔が湧き出し、二小隊の二、三、四番機を照らし出す。

各機が回避行動に移るより早く、新たな火箭が三機の銀河に突き刺さる。

二小隊二番機は、エンジンを撃ち抜かれたのか、炎を引きずりながら海面に突っ込み、三番機は燃料タンクに被弾したのか、火だるまに変わる。四番機は空中をのたうち、海面に突っ込んで姿を消す。

「全機宛発信！『散開。個別ニ突撃セヨ』」

吉沢は伝声管に怒鳴り込むようにして、井上に命じた。

二小隊を襲ったのは、敵の夜間戦闘機だ。

盟邦ドイツは、米英の夜間爆撃に対抗するため、電波探信儀を装備した夜間戦闘機を配備しており、米英もまた同種の機体を戦線に投入した。

この情報は、マリアナの一航艦にも伝えられている。

米軍は欧州で使用実績のある夜戦を、太平洋にも配備したのだ。

吉沢機の前方では、嚮導機が高度を下げている。

中井上飛曹が操縦桿を前方に押し込んだのだろう、吉沢機も降下に入る。

樋口も、中井も、海面に貼り付くことで、電探による探知をかいくぐろうというのだ。

「針路を東にずらせ。竹島の飛行場に投弾する！」

吉沢は、中井に指示を送った。
攻撃目標は春島の飛行場だが、吊光弾がなければ、飛行場は視認できない。
かといって、第二小隊の四機が全て撃墜された以上、吊光弾の投下は望めない。
だが、竹島は小さな島を丸ごと飛行場に仕立て上げたような基地だ。竹島に投弾すれば、敵飛行場に、確実に損害を与えられる。
第二小隊全機を失った今、他の手段は考えられなかった。
先に降下した嚮導機は、吉沢機を先導するように、左旋回をかけている。吉沢機も、嚮導機に続く。
「田代機、西山機、本機に続行して来ます」
井上が報告を送って来た。
第一小隊の三、四番機だ。指揮官機に遅れず、付き従っている。
他の小隊の動きは分からない。
当初の予定通り、春島の飛行場に向かったのか。
あるいは吉沢機同様、竹島を目指しているのか。
いずれにしても、二四機の銀河で爆撃を集中し、敵飛行場一箇所を使用不能に陥れることは不可能だ。
各機が思い思いの場所に投弾し、多少なりとも敵に打撃を与える以外にない。
高度一〇〇で飛んでいるときには、ほとんど視認できなかった海面が間近に見える。手を伸ばせば、届きそうなほどの近距離だ。
中井は、海面に接触する寸前まで高度を下げているのだろう。僅かな操縦桿の操作ミスが、死に直結する高度だが、不思議と恐怖は感じない。
海面に衝突する危険はあっても、闇の中から不意打ちを食らう危険はない、との安心感があるためか。
右前方に、おぼろげながら春島の稜線が見える。
米軍のトラック侵攻に際しては、真っ先に爆撃を受けた島だ。
その春島にあった飛行場も、今は米軍の航空基地

として整備され、マリアナ諸島を脅かしている。
右前方に、新たな島影が見え始める。
第四艦隊が司令部を置いていた夏島だ。トラックを巡る地上戦闘では最大の激戦地であり、司令長官小林仁中将以下の司令部幕僚も、全員が戦死したという。
（仇は討ちます。必ず！）
胸の内から、その言葉を夏島に投げかけ、吉沢は正面を見据えた。
目指す竹島は、夏島の南東に位置している。目標までは、指呼の間と言っていい。
「小さな島に作られた、大きな飛行場」に投弾する瞬間を、吉沢は思い描いていたが――。
「……！」
吉沢の口から、声にならない叫びが噴出した。
機体の右方――夏島の東岸付近から、全く唐突に、何条もの光芒が延びたのだ。
吉沢機と、前をゆく樋口飛曹長の嚮導機が、照らし出されている。
ほとんど間を置かずに、横殴りの火箭が殺到して来た。
樋口機が、右主翼から火を噴く。
片方の推進力を失った上、炎を噴き出した樋口機は、大きく右に旋回しながら海面に突っ込み、炎と共に飛沫を上げる。
五二二空にとって、いや海軍航空隊にとって、何よりも貴重なベテランは、乗機と共にトラックの礁湖に激突し、散華したのだ。
「田代機、西山機被弾！」
電信員席の井上が、伝声管を通じて悲報を届ける。
吉沢が率いる第一小隊は、瞬く間に一機だけになってしまったのだ。
「くそったれ！」
吉沢は、罵声を放った。
夏島の影に隠れていた敵艦が、第一小隊の横合いから、対空砲火を浴びせて来たのだ。

トラックが陥落する前、帝国海軍は、夏島の東側を小型艦艇用の錨地として使用して来た。
米軍もかつての主に倣い、夏島に駆逐艦以下の艦艇を多数停泊させていたのだ。
それらが、竹島に向かう銀河に対空砲火を放ったのだ。
操縦員席の中井は、回避運動を始めている。
機体が右に、左にと不規則に旋回し、敵弾と光芒を回避している。
右方から噴き延びる火箭が、風防ガラスの真上や真下、あるいは正面を通過し、機体の左方へと抜けてゆく。
衝撃が襲い、銀河の機体が大地震のように揺れた。
「右主翼に被弾！　井上がやられました！」
伝声管から、中井の絶叫が飛び出した。
脱出も、サイパンへの帰還も不可能となったことを、吉沢は悟った。
ここに至っては、やるべきことは一つしかない。
「突っ込め、中井！」
「了解！」
命令を予期していたのだろう、覚悟を決めたような中井の返答が届いた。
銀河が右に傾き、水平旋回をかける。
光芒が正面から浴びせられ、眩い光が偵察員席に満ちる。
その光に導かれるようにして、銀河は敵艦へと突進する。
吉沢は、機首に装備している二〇ミリ旋回機銃を正面に向け、引き金を引いた。
両腕の中で銃把が躍り、視界が上下にぶれる。
吉沢は銃把を放さず、引き金を引く指も緩めない。
機銃を撃ち続けている間は生きていられる、という気がした。
光芒の向こうに、敵艦の姿が見える。クラス名は不明だが、駆逐艦のようだ。
目標が凄まじい勢いで拡大し、視野一杯に広がる。

吉沢は、なお二〇ミリ機銃を撃ち続けた。
機体が激突する寸前には、全ての銃弾を撃ち尽くしていたが、吉沢の右手の人差し指は、最後の瞬間まで引き金から離れなかった。

2

「トラックは、完全に米軍の基地になってしまったのだな」
「遺憾ではありますが、そのように考えざるを得ません」
深々とため息をついた海軍大臣山本五十六大将に、戦時中三代目の連合艦隊司令長官に親補された小沢治三郎中将は言った。
この日――昭和一九年九月一六日、宮中で連合艦隊司令長官の親補式が執り行われた。
小沢は親補式の終了後、霞ケ関の海軍省を回り、山本海相に挨拶すると共に、去る九月一一日に実施したトラック攻撃の結果を報告したのだ。
マリアナの第一航空艦隊はトラックの敵飛行場に対し、五二二空による夜間長距離攻撃を試みたが、同部隊は夜間戦闘機や対空砲火の迎撃を受け、戦果らしい戦果は上げられなかったのだ。
「トラック環礁は、完全に日本の手から失われた。のみならず、前線基地の建設を妨害することも困難となっている」
それが、この敗報からはっきり言えることだ。
帝国海軍が、国防の要と考えて来た中部太平洋最大の要地は、今や日本を脅かす凶々しい存在へと変貌しつつあるのだった。
「連合艦隊長官（G）からの退任に当たり、古賀（古賀峯一）大将（F）。先代の連合艦隊司令長官）が言っていた。『自分はつくづく、己の分というものを思い知らされた』と」
山本は言った。
「古賀は、軍令系統の職を歴任して来た男だ。経歴

と序列だけを見れば、確かにGF長官に相応しく見える。だが、如何せん実戦経験が乏しい。戦時のGF長官には実戦を経験した者、特に米軍の恐ろしさを肌で知っている者こそが誰よりも相応しい。古賀はそう言って、貴官を後任に推挙したのだ」

「貴官は実戦を経験しているだけではない。帝国海軍の中でも、知恵者として知られている」

同席している軍令部総長の吉田善吾大将が微笑した。山本とは江田島の同期生であり、互いに「俺、貴様」で話す仲だ。

「私も山本も、諸手を挙げて賛成したよ。今の時期、貴官以外にGFを委ねられる者はいない、と」

「恐れ入ります」

小沢は頭を下げた。

「米軍の恐ろしさを肌で知っている」ということは、確かにその通りだ。

小沢は開戦直後、南遣艦隊の司令長官として、圧倒的多数の米英連合軍と、海南島の沖で戦っている。

ウェーク沖海戦でも、敵機動部隊の先制攻撃を受けたことに加え、新鋭戦艦を含む水上砲戦部隊の待ち伏せ攻撃を受け、あわやというところまで追い込まれた。

先のマリアナ沖海戦では、多数の新鋭空母を揃えた米機動部隊と正面から対決し、その実力を思い知らされた。

小沢ほど窮地に追い込まれた経験を持つ指揮官は、稀であろう。

今後は連合艦隊司令長官として、その経験を活かすことになる。

「GF長官として、要望はあるかね？　人事に関しては、できる限り希望を容れるつもりだが」

力のこもった口調で言った山本に、小沢は遠慮なく言った。

「参謀長は、加来少将（加来止男少将。第三艦隊参謀長）を希望します。先のマリアナ沖海戦は、複数の機動部隊を同時に運用するという難しい戦でしたが、

加来はよく補佐してくれました。GFの参謀長も、立派に務められます」

「いいだろう。艦隊の指揮官はどうだ？」

「機動部隊の長官に、山口多聞を任じていただけますか？」

小沢は、考えていたことを口にした。

山口多聞中将は、開戦時の第二航空戦隊司令官だ。航空界には少将任官後に転じたが、知識の習得は早く、第二航空戦隊の搭乗員を、機動部隊でも一、二を争う技量に鍛え上げた。

マリアナ沖海戦では第二部隊の指揮官として、四隻の正規空母を率い、敵空母六隻の撃沈に貢献した。

第二部隊の旗艦「翔鶴」は、敵機の猛攻を受けて沈没したが、山口は幕僚共々他艦に移乗し、生還している。

勇敢さと粘り強さを併せ持つ、得難い指揮官だ。

古賀峯一に連合艦隊司令長官への就任を打診されたときから、小沢が考えていた人事だった。

「山口が有能な指揮官であることは認めるが、若すぎないかね？」

懸念を表明した吉田に、小沢は笑って答えた。

「私のGF長官就任の方が、遥かに若すぎます。山口は中将に昇進して一年以上が経過していますから、長官就任の条件は満たしています」

「防御重視の戦略を採るのであれば、山口は不適当ではないか？　勇敢さが災いし、兵力の損耗を招くかもしれぬ」

「山口は柔軟な思考力を持っています。作戦目的を入念に説明すれば、猪突猛進はしないと考えます。何よりも、彼の粘り強さに私は期待しております」

「山口のことは、私もよく知っている。二度に亘る米国滞在の経験を持ち、敵を知る男だ。山口に機動部隊を任せてみよう」

山本の一言に、小沢は深々と頭を下げた。

「感謝いたします」

「山口が有能であることは認めるが、機動部隊の現

有兵力で、米艦隊に対抗できるだろうか？」

吉田が顔を曇らせた。

マリアナ沖海戦で対峙した日米の空母は、日本側が一三隻、米側が一四隻だ。

同海戦で、日本軍は空母六隻撃沈、二隻撃破の戦果を上げたが、正規空母の「赤城」「加賀」「翔鶴」、商船改装の中型空母「隼鷹」を失い、正規空母の「大鳳」「瑞鶴」「蒼龍」が損傷した。

搭載機数が多い「赤城」「加賀」「翔鶴」の喪失は、大きな痛手だ。残存空母九隻中、正規空母は四隻だけであり、他の五隻は中小型艦なのだ。

敵にもかなりの損害を与えたものの、米軍の回復力は、日本とは比較にならない。

次の戦いでは、差は更に開くことが予想される。

「現状では、勝利はおろか、五分の戦いも望めぬと考えております」

小沢は、少し考えてから答えた。

もう少し控えめな表現にすることも考えたが、こは現実を直視すべきだと思い直したのだ。

吉田は、あからさまに不快そうな表情を浮かべたが、小沢は構わずに続けた。

「機動部隊戦の勝敗を左右するのは、空母の数よりも搭載機数です。米軍の正規空母と比較した場合、搭載機数で対抗し得るのは『瑞鶴』のみであり、『大鳳』『蒼龍』『飛龍』は五割乃至六割、他の五隻は半分以下です。この状態で正面から戦っても、勝算はありません」

「『雲龍』と『天城』を編入しても駄目かね？」

吉田が質問を重ねた。

「雲龍」「天城」は、戦時下の量産を図った中型空母雲龍型の一、二番艦で、この八月に竣工している。艦上機の運用能力は「飛龍」と同等だ。

この二艦が加われば、空母は一一隻となり、機動部隊の戦力は大幅に強化される。

「雲龍型の搭載機数は、『赤城』や『加賀』に及びません。また、空母の数よりも、熟練した搭乗員の

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。